

物理っておもしろい？

## 物理はおもしろくないが、研究はおもしろい

長谷川修司

通勤途中の駅の本屋で「50万部突破！」という真っ赤な帯が目に入り、思わず買った本が姜尚中著『悩む力』（集英社新書、2008年）。この著者はテレビの討論番組などでよく見かけていたが、私はあまり好きではなかった。なぜなら、ダンディーな風貌と物静かな語り口に惹かれて、私の妻が同氏のファンだからである。しかし、この本で、私が日ごろからモヤモヤと感じていたことが明快な言葉で表現されていることを発見し、彼に対してもっていた不快感が吹き飛んだ。

「何を知ることができるのか、何をなすべきなのか、何を好ましいと思うのか、それらは科学と合理化の進展とともに分裂を始めていく」

「科学が教えてくれるのは人間らしい価値観や道徳観念といったものとは無縁のところにある」

「知性(科学——筆者註)の専門化、断片化が進み、人間がどう生きたいのか、どう行動したらいいか、何を信じたらいいのか、といった切実な“意味問題”が、ますます非合理的な(科学の外の——筆者註)決断の領域に押し込まれていく」

なるほどそうだったのか！と膝を叩くのは、私ぐらいだろうか……科学は、誰でももっている根源的な問いかけ「人間はどう生きたいのか」といった“意味問題”に対して答を与えてくれないばかりか、むしろそれに対して積極的に背を向けるような役割しか演じないという。漠然とは感じていたが、こう明確に断言されてしまうと、科学者の端くれとして少し寂しい。科学の使命は自然の摂理を解き明かすことなの

で、このような人間的な“意味問題”に科学から答を求めることなどの外れもいいところだ、と読者諸氏のほとんどは思われるだろう。しかし、私は、それを承知しつつ、それに納得したくないという天邪鬼のもう1人の自分が頭の片隅にいることを知っている。“意味問題”に対して科学の立場からチャレンジすることを放棄したら、心の底から「物理はおもしろい」とか「科学者は楽しい」などといえないだろう。

まもなくして、大学生協の本屋で酒井邦嘉著『科学者という仕事』（中公新書、2006年）という1冊を見つけた。この著者は、私の研究室のとなりであった生物物理の研究室出身だそうで、多少の親近感を覚えて思わず買った。上述の姜氏の反科学とでもいうべき考えに打ちのめされていた時期だったが、この本を読んで少しは救われる気持ちになった。酒井氏は、“科学”と“科学研究”を明確に区別し、アインシュタインやニュートン、朝永振一郎、寺田寅彦などが残した名言を頼りに、科学研究の意味や研究者のあり方を論じている。そして、そこから上述の“意味問題”に迫っているように思える。

「科学研究は、科学という知識体系を超えたその先の“分かる”という領域にある」「我疑う、ゆえに我あり」「研究は人間ドラマ」「科学者は学問の前では永遠に学生である」「“個”を磨き、“個”に徹すること。大衆は群れて何も自分で考える必要がなくなる。研究者は、自分で本当に良いと思える仕事を残すこと。評価は二の次で、自分を正当に評価できるのは自分しかない」「研究とは、さまざまな制約のもとで自分らしい個

性を表現すること。芸術家がめざす自己表現となら変わらない」

科学者がつくってきた知識の蓄積である“科学”は、それ自体、「人間はどう生きたいのか」といった“意味問題”に答を与えてはくれない。しかし、“科学研究”が何らかの答を与えてくれそうだ。酒井氏がいう“わかる”ことはひとりひとりの価値観によって違うはずだが、“わかる”ことが科学研究そのものであるという。研究の経験のない人には信じられないだろうが、“科学研究”では、同じ研究テーマでも人によってアプローチが違うし、求める答ええ違うこともある。大学入試までの物理や化学とは、まったく違うのである。だから、酒井氏がいうことは心の底から納得できる。私が何のために物理学の研究をやっているのかといえば、「“個”を磨き」、自分らしい自己表現をするため、自分らしい価値観を見つけるためだ、とこの本は教えてくれる。

だから、先人たちが築いた物理学の知識を“知る”こと自体は、自分の人生にさしたる意味をもっていないし、その意味で物理はおもしろくないといってもいい。しかし、既存の知識を超えた領域、先人が考えたこともないことを考える科学研究を通じて、自分が何のために生きているのか、自分自身の価値観は何なのかがわかってくるし、それを表現することができる。「研究とは自分探しの旅」なのである。その意味で、研究はきわめておもしろいといえる。青少年に、物理はおもしろくないが、自分らしい創造的な仕事ができる物理研究はとってもおもしろいよ、と断言できるのは、この理由によるのかもしれない。